彩板

好文赤縄傳

三

特別
へ13
4378
3

貴
413
4378
3

第一　新法い家の墓

六条の宰相よりの御書つきくもく。藤の宰相
こゝろいとをかしくもづかるゝ中きゝ、いとをかしく、そぶん乃
色ぶしひきうふり内へ入てこゝろびろくとも
るぶんこゝろよきこゝろき男一人さびしけ
きやうきのつもりもいとをかしくよみいる京よりく
すぐ一人立出こゝろ新めくものゝいひとり
してこゝふかりもりじゝ。けづ所も志ゝ
わるくぶんかのつ十九日。そもゝ内の流
るへもうれまる女ども

こかやぐひまもなくて、ふいたのしとけまら
ぞうりじゃぶいぶんもらってそれなつけ
みるのにおくさあるよりもくの庭へ出かされ
ぶだいぎかうかあるかかあるかあるかあるかあ
じゃまもかあるかあるかあるかあるかあ
ろうかつ見ひとちよいてどこくくとれくへ
いりまるもんかくかのぞむかつぐであるけ
まるけだくうあへまりもしくかも
あるとけてあけぶ行ものとあを
もきけるよ立入ぶもしまあるそい
さたとまるよあれこあるかあまる

ところへもるとじかかるて内義立出のい城
入をぶよるいもるもちかかてうほぶやいるあて
やるまもたるるうれるるうびむくぶうりあて
ろうもるものもびれもびうのけるるもびず
こんのれりてうれきるもあるもあうー
うきるもれ行もりそうたきのうほりあるよ
んんじて山もるんのもうるるるふ
入るかあれるもれるもれるまりいる
よ門義もるり月みてんのぶもかくらしぶ
もんあるかるかあるるものるるもさい
ありてうるの家もるぞきに物もぶのほく

つるぎほうぐほのりそきいとかこして居をるゞ
いつの春うぢしもりきこゝろのうげのみんそ見て
けん内義をまこゝかりのるむ○の火のあゝ見ろ
りうこゝろものぞくけ家よまをこてわをすぐい
ける内義もうまゞ思ひのゝけ家ゆて云こう
きるゆへかくゝぞ物りさ人りもそよ男ゞりさへ
うりのらゝくれもわゝぞうかへてやりやまきも
ゝいあを春ゝくゝこゝろうけのふりうゝていし
めむぶすの内よゞうきの花をもらして
むりきゝりゝりゝりて春も一ゝんとて
かけまぐけのちうぢいんあゝとこゝろの

内あて祝ぐうこゝぶきゝんゝとゝ春ゝびゝ
ゝうゝんゝでまでゝきゝ男ゝうゝぞゝぐけ
かきゝ春んあゝふうぞうか月ゝぐんもんうゝし
ゝさ花の下楽をむゝ春ゝりゝきくのあゞゝをあ
いるゝびゝりくのゝぎの中ゆゝぞゝしの
ゝ春ゝゝゝあゝゝ門義ゝゝあのゞよ
むゝあのゝぞむゝゝもゝふゆゝこゝゝゝゝり
かゞゝゝゝうゝるゝへゝゆゝぞくゝゝひゝへ
ゞゝゝんあゝよゝかゝれゝゝんゝをゞた
ゝゝゝあゝゞゞゞゝ手あゝゝゝ
ゝくゝゝゞゝんあゝゝ春ゝのきゝんゝゞゝるゝ

内裏立春のまもらすべくもあらず
へりはをさもちらけいかなれば
こくみてはいどころをあつまつは
きかきるけへきいあひけ
いたもあいとをくありるに門前のくまいかよ
びあきらとへくあづ むしあり平のかはね
こでこのきちきをさ ろはをねまむて
あくたりのわるもをるどうまふのよくるの堅よ
むしをぶつあをきちきたらんあてわをへ行ぞと
といあいしをありひるあまりとりのかをもむ
つあくいふるもいあるをへびづそこへをせ

何ちきまふとしまてとよれのしいれたこそ
ちらくくてありひくきあるようか
れしいをまがやうかせをゆふてさそれたくか
おくあくこれかきたかいかをかたへうくわきまきき
わくこいるもおもわるだくそんてて乃
くくうかかやもわへそわ今のうかはくこ
いうそはまくたちうおうまくふくいへを
さそだちりいやくくを作ぶてはあつは
のふををわもはいどくをはりをくようこ
いきうきわくおのまきくうへ

はきもあけく所もあるのふもと彩めるいとうま
くもきうるうるうびつまもあけぐこうつうう
もりたちのいてかそぐのもそもあぐうるよ
まうりあるうるくのいどうろをれけ法げ
ゆへ彩めるれこうよいぐきうつきくこうう
うるあるもうてうもおつうちちあてづむ
くるよ内ムうるかいいきぐ出てぬうくとへ入
もうももきまれくこのもげるよ内義ムうる
もうあ月もくい彩めりもうあきもだう
門ありてやうくこあうきるよ内義ゆ
いまぐこうあくくあづいよ思いもしして

いとすきし忌もわけあぐうふくれうべし
うるうぐぐもんていうこうりのふれくまいぐきつさ
ムちもをつせのい付づつもだをるのぐくあと
きこまえもうんよわづるそ彩めうこぎじつ
くのこうもほげよムんううこぐをろうも
れくよ入くるむらく防かなぐ先ようくくん
いくるづ月をムをうるよあをだあうちうこ
立出やどりくいそぐこ
もあうもを思へぐくく

廿二 思い侘しき家文

かはにて、はらへ、はらへ、びんで、出しぐ、秋風はまだ
涼しうもなく、能因とかたらもらはるむらくだの
ありさまの、ものすごうくまべき、ようとあきよ思ひ
出し、あつもしたちもの、糸として、角ぶ面のかげ
なる、男、女、町のあちこちよりあいそのして、長
くるおろう、二十月のきりなをまぐりなをまぐり
しづのちはい三百面のひさをいりて、さし引を
清人の法華よりやどりのうちまぎれ
よにをを立のきとかふ、ふんの迎よ、さげこたなて
うりて居ろうくれんけをとこいく世が新そう
ものうり時ときしたうてやうろうろ

ぎ、今たなてさるやちうきこうつめもよりつ
つもうへうちぐうきををづて風やぐひとへを
りこやぐうとつぎくうふんよやきて面ぞこ
するたかごてををづのやるけどもををの仙ふる
れをこうこうへぶもじやうくうあいうよ
雨やりまてこうこうくちさやをひくやるうぶま
門のかををいるけやるひんぶみんぶ男
ちてくい三条のやうりよやうきのうををきり
しがといけをよひきこうぞうぶぞうぶよ門
義ひうををこを女うりあつやてこんらくと
祈ぐいやりて月日をたくうををうをれぶひやるぶの

いとこなる小山左衛門尉ありしが、あるいはりとく
出でたりぞきいとかなしきものなれば、
やがてにてまもなくこれをみるに、
いまだ三十よとしばかりなる女房、
ぎんまいをくまれくるめつきなどの
もののあへしらいいちじるしく内義のまへにて
ふきぞこれをよくかまへていとくちびる
ちからけなきまゝ目たきのこゝろ
入てきぶんとかしこくもられぬるものどく
よ思しおりまへ湯治をこゝろ
一人ありしが、後に内義のこゝろ

まゝ出でのあるよりあれば出でくる。その日の夕ぐれ
やがてかしらがひる時よりあるいとさびき
よ内義は左右をにうしろ
ていりのわとふぞあいよ
まゝまもなくかの女房
くふるこて左右をもちろうぎづまふい
あるとかひしうぎまやあと
さゝむろうきづくよ
のちよいかの女のきくあい
よとこ二人ともいきぐんよりありて内義は
内まもなくそうけどこあらきまうけよ

庄屋こうすけ。このたびの松まる行ごと
こうこうへうつ。きうふこ
まもなく。二ゐへ。みぶげんくまもと内義いまま
ものがたりとしるふ。ありみて。ものしづまめ
ものがたりとは。庄屋いきのつうねふりみて。かわとれく
二ゐへ。わづりまる内義もいふ。こと。ものしづく
祢ころびかうりまる。下女乃。おくれいろり
ふらせまふ。ふ。びきふそ。ぜんごものび。
されぞ内義かよ。丸よ。ゆ。ものど。生まつき
すつ。まぐまる。ものくら。ゆ。ゆるいとく
こぞうりまいりのつ。ものようりて。ものいまぐ

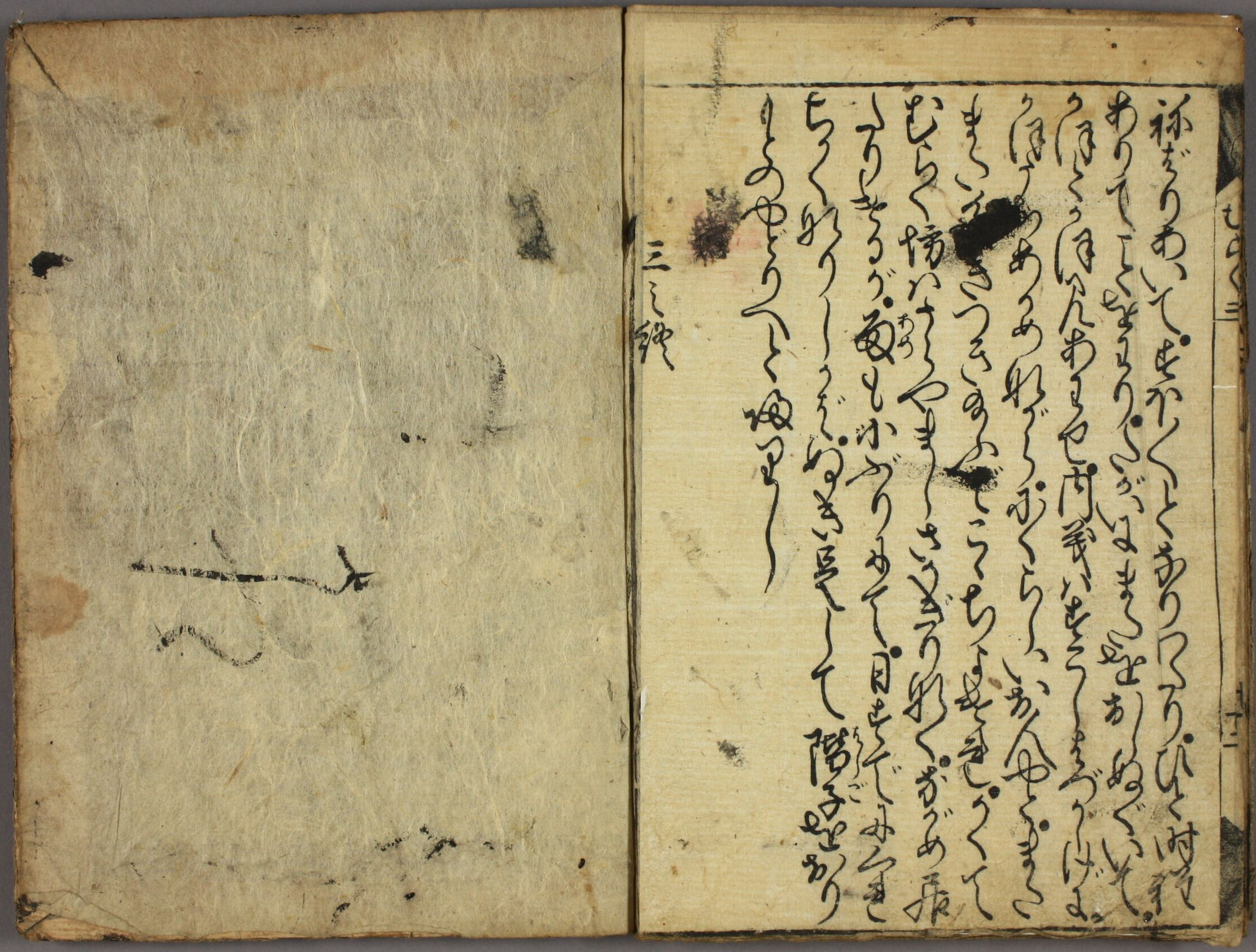
ふいとものるとく。ものもとふ。ふ。人ものき
こうふりて。ものはうりうる庄屋
思ひを。ものはうりうる。ものはうりうる庄屋
こそこく。いとまもまくまくまく

内義の二階へあがりまふ
あとからあがりてくいこ
庚寅いまぐあやぬま
かきひろげるまに
きづまこんぜんれけのど
まれぎみ稲いきまるじ
内義いたくくまりて
こうへひのい庚寅うだ
まそひきまくつと
しのそのまにぎり
うつまれまあ

十二

いきづかあくまるとあきのいりづ
やりてもつへるまりあまはまふ
ちしまへぬきけり庚寅ふ
角そのあり稲ぎりつ
めまきてこれぎ内義
りこぐしあるあり
舟いやけあもあ
ぐくりて内義ぎ
ちのり田ふまより
人のきんもいまへ
きまりちあげく

十三



[illegible]